

長澤亮太遺稿集「富士の如く」富士宮市役所に寄贈しました。

産業開発青年隊同窓会 会長 鈴木 浩明

10月4日火曜日、富士宮市に「富士の如く」を寄贈してきました。参加者は、鈴木同窓会長、栗田名誉会長、松永監事、渡辺東海ブロック会長、菅井事務局長、田代事務局そして鈴木 弘市議会議長の7名で参加をしてきました。この寄贈では、私の知人であります、富士宮市議会議長の鈴木 弘議長のご尽力をいただき実現しました。

旧建設省建設大学校中央訓練所の所在地である富士宮市にこの「富士の如く」を寄贈することにより、私たちの産業開発青年隊と、この創設者である長澤亮太先生の偉業をいつまでも記録に残るようにと活動をいたしました。

まず、鈴木議長に「富士の如く」をお渡ししました。そして上記の趣旨を説明し、富士宮市への寄贈をどのようにしたらよいかを相談しました。そして、教育委員会にこの「富士の如く」を届けていただき、教育委員会との打ち合わせを数回し、この度の池谷教育長への「富士の如く」の贈呈式、そしてその後の、須藤市長への表敬訪問が決定しました。

池谷教育長との贈呈式では、私より長澤先生の産業開発青年隊としての教育についての説明、(昭和26年厚生省人口問題研究所在籍中の現地調査により、山形県において青年団が農業産業開発青年団を組織し、寒河江川の河川工事に従事しながら、教育訓練を始めたこと。宮崎県が公共工事に従事しながら教育訓練を開始したこと。静岡県が、佐久間ダムの電源開発の補償工事の一環として、ダム建設に関する最新重機の教育訓練を開始したこと。を見聞し、これを国策の教育訓練とできるよう、働きかけ建設省による産業開発青年隊教育が昭和28年より開始されたことを説明。)昭和38年に富士宮市に複数年の教育訓練の実施機関である建設省建設大学校中央訓練所が設立されたことに関する説明。

(単年度での教育をさらに発展させ、複数年の教育訓練を実施するために、その教育訓練施設の建設を目指し、候補地をあたり富士山の麓の富士宮市に設立した説明をしました。そして、令和5年11月に産業開発青年隊創設70周年記念大会を予定している説明を行いました。そして富士宮市に、建設省の教育機関があり、数多くの卒業生が巣立っていったこと。そしてブラジル移住された約300名の先輩方がおりさらに海外に雄飛をし、活躍している者もいること、そして国内においても様々な活動をされていることを説明しました。

池谷教育長には、熱心にわたくしたちのお話を聞いていただき、本当にうれしかったです。すでに廃止となっている教育機関である産業開発青年隊のことを理解しようと努力していただいたことに感激をいたしました。また贈呈式の最後に、私にこのように熱心に説明をしていただいた方々は初めてですとお言葉をいただき、私たちの熱意が通じたのだと思ひ、うれしい限りでした。

その後、市長室に移り須藤市長に表敬訪問をさせていただきました。須藤市長には昭和38年に朝霧高原に建設省建設大学校中央訓練所が設立された経緯を重点的に説明させていただきました。山川市長や、植松県議会議員の理解により設立できたこと。そして県立

東高校の移転に伴う敷地造成工事に、ブラジル移住班の先輩方が従事したこと。その時の記念碑が現存し、今後も同じ時に設置された校訓の碑とともに残していただけること。現在のブラジルの南米産業開発青年隊協会の会長は、富士宮市役所の下水道課に在籍されたことがあること、そして東高校造成工事の指導に当たったのが、少年戦車兵学校の卒業生である、吉留先生であったことを説明し、私たち、産業開発青年隊の中には、少年戦車兵学校の教育が生きていたことを説明させていただきました。

須藤市長に、少年戦車兵学校のことを話したときに、跡地である若獅子神社の戦車を郷土資料館を建設した時には大切な資料として展示をしていかなければならないとの言葉をいただきました。また、政教分離ということがあるため、若獅子神社に郷土資料館を建設することは無理であるから、良いスポンサー企業が見つければいいのだがと、お話をされました。これらの話は、岳南朝日新聞に投稿されていたといわれたので、私が投稿しましたとお話をしました。関心を持っていただいたことに感謝です。また、この前日に宮古島災害復旧のこと、そして翌日には産業開発青年隊が朝霧高原に設立されたこと、そしてその翌日に贈呈式並びに表敬訪問の記事が岳南朝日新聞に掲載されました。

このように関心を持っていただけるようにしていただけたことに感謝いたします。

私たちにできることは、一人でも多くの方々に、長澤先生の偉業を知っていただくことであると思います。長澤亮太とは、いかなる人物であるのか、産業開発青年隊とはいかなる組織であるのか。そして、多くの方々に、明治維新を成し遂げた多くの志士の方々の中には、藩校での教育を受けることができなかつた多くの若者が、吉田松陰先生の私塾としての教えである松下村塾の教えが基本にあったこと。そして長澤先生は、戦後復興を第二の明治維新ととらえ、躍進する日本への再興を目指し、この教育方針を基本とし、産業開発青年隊教育に邁進されたのです。私たちは貴重な体験を青年時代に体験させていただいたのです。この感激をぜひ後世に語り継ぎ、この教育を衰退させないように努力を惜しんではならないと思います。

ひとつわれらは、産業開発に呈して人類平和のために尽くさんことを誓う

ひとつわれらは、友愛と団結をもって理想の社会を建設せんことを誓う

ひとつわれらは、不屈の信念をもって創設の大業を達成せんことを誓う

そして、富士の如く美しく雄大に尊厳なれ

との長澤先生の掛け声にわたくしたちは、答えていかなければならないのではないのでしょうか。

そして、吉田松陰先生の「かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂」 こうすればこうなってしまうだろうとはわかっている、それでもやめられないのが大和魂というものだという意味です。義を重んじること。義とは正しい行い、正義という意味と同時に、損得を考えないという意味があります。自分が正しいと思うことのためには、行動し続けること。その結果、自分に不利益が及ぶとわかっていたとしても、それが正しい道ならば進み続けること。

私たち、日本人は、高度経済、バブル経済に翻弄され、経済優先、経済第一主義のもと邁進し続けました。そして世界中のビルや会社を買いあさりしました。そしてバブル崩壊後、いまだに二十年以上デフレにあえぎ、苦しんでいます。そして巷には、自由には義務があることを知らず、自分のためだけに生きる利己主義者が誰ほど多くいるのでしょうか。

長澤先生は、昭和46年の世界ジャンボリーの日本人スカウトの行動においてこのような警笛を鳴らしていました。まさに50年後の今、日本がそのツケに悩まされているのです。産業開発青年隊70周年記念大会に向け、教育、絆、そして義を中心に多くの方々の心を震わすことができる活動をしようではありませんか。

皆様の義を、そして行動力を、そして産業開発青年隊としての友愛と団結を信じ、そしてこれらを理解していただける一般の方々と共に歩み行動いたしましょう。

以上。